# 短期大学における初年次教育の取り組みと課題

堅田 弘行*・橋本 祐治*・増原 真緒*・長島 佳奈*

要約

大阪健康福祉短期大学保育・幼児教育学科では2022年度入学生から初年次教育として、授業の予習や復習をするための情報収集の方法、レポートの書き方、グループディスカッションやプレゼンテーションの方法を授業で指導している。学生の質が日々変化する中で、高校での学びから大学での学びへと円滑に移行するために必要な学びとはどのようなものなのか、教員はどのように授業を準備し、どのような環境を整える必要があるのか。本学科の教育の質の維持・向上のために効果的な授業運営の在り方を模索する。

キーワード：初年次教育、授業改善、短期大学

2024年12月27日受理

## はじめに

2018年度に本学科を開設して以降、授業の度に「書く力」、「考える力」、「話し合う力」が不十分であることが指摘されていた。特に「書く力」や「考える力」はレポート課題の度に議論の俎上に載せられていた。そのような中、2021年度に教職課程の再課程認定事後報告に合わせて、保育士養成課程のカリキュラム変更を行い、2022年度入学生から新たな教育課程で保育者養成を行うこととなった。このカリキュラム変更に伴い、これまで取り組むことができていなかった在学生の「書く力」や「考える力」、「話し合う力」を育てるための方法が話し合われた。

本稿は、2022年度入学生から取り組んでいる初年次教育としての授業について振り返り、その成果と課題について検討するものである。

## １．入学者選抜試験に対する課題

本学科の入学者選抜試験では、科目試験をおいているものは併願受験の一般選抜のみで、入学生確保をねらった様々な専願入試の科目は面接と、選抜方法によっては小論文を組み合わせたものであった。小論文試験は学校推薦型選抜で設けているが、出願書類とともに事前に提出する方法の選抜試験と、学生募集要項に示したテーマのいずれかを出題する方法の選抜試験を設けており、受験前に何かしらの指導を受けられることを前提にした課題設定をしていた。そのため、入学者選抜の小論文課題は高等学校の各教員による指導の内容を反映するものであり、指導に対する力の入れようによってその評価には大きく差が生じることに至った。もちろん、各受験生の学力レベルにはいくぶん差があるものの、入学者選抜試験での小論文を作成する力が入学後のレポートを作成する力に反映されているかというと、決してそうではないことは各教員が共通して認識しているところである。

入学者選抜試験は、卒業認定・学位授与の方針や教育課程編成・実施の方針を踏まえ定めた入学者受入れの方針に基づいて、大学への入口段階で入学者に求める力を多面的・総合的に評価・判定することを役割とするものである[1]。本学科の入学者受入れの方針において求めている学生像は「(1) 子どもが好き、人間が好きで、いろいろな人とかかわりたい。(2) 誰かのために、自分を生かしたい。あてにされる自分を発見したい。(3) 人間のくらしや社会に関心があり、さらに理解を深めたい。(4) いろいろな人と力を合わせて、子どもと一緒に自分も成長したい。これらの目標に向かい、自分の生活や経験について振り返り、他者にそのことを伝えることができる学生」である。学力の３要素である「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力」、

*大阪健康福祉短期大学　保育・幼児教育学科

「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」は様々な科目によって評価をするものの、入学者に求められているものは、あくまでも意欲である。そのため、入学生の「書く力」、「考える力」、「話し合う力」が不十分であったとしてそれは不思議なことではない。

## ２．入学前教育に対する取り組み

入学以降に必要となる「書く力」、「考える力」、「話し合う力」が入学者選抜試験で確認できていない以上、それらの力を入学者選抜試験以降に育てていく試みをしていくことは必然である。しかし、入学前教育で、途端に入学者選抜試験と異なる内容を求めても、入学予定者の意欲を削ぐものになりかねない。そのため入学予定者の負担を考慮に入れながら、2021年度以降、若干の変更を加えながら今日の入学前教育に至る。以下に、2021年度入学生から2023年度入学生までの入学前教育を記していく。なお、いずれも郵送で課題を提出し、添削コメントを記して返却するという形をとった。

### (1) 2021年度～2022年度入学生

① 児童福祉や幼児教育に関する新聞記事等のスクラップノートを作成し、記事等を読み返す中で、それに関する気づきや考えを記録する。

### (2) 2023年度入学生

① 新聞記事の要約課題
② 絵本の紹介
③ 折り紙はり絵の制作

①新聞記事の要約課題において2021年度入学生と2022年度入学生では、同じ課題を記しているが、2022年度入学生においては、この取り組みをもとに、入学直後から受講する「保育基礎ゼミⅠ」で、テーマを設定し調べ学習を行い、小論文を作成することとしており、入学後の学習への接続を意識したものになっている。2023年度入学生に対しては、これまでの新聞記事を入学予定者が任意のものを選ぶものから本学科教員の指定するものに変更したほか大きな変更はおこなわなかった。なお、この変更は入学前教育を受ける学生の中で新聞をとっていない家庭があることに起因しており、内容の改善のための変更ではなかった。そして、②絵本の紹介は領域「言葉」を、③折り紙はり絵の制作は領域「表現」を意識して設定し、大学入学後の教育課程との接続を意識したものとなった。

## ３．本学科の初年次教育の取り組み

### (1) 初年次教育

杉谷は『進化する初年次教育』において、「初年次教育は、専門教育以前に、大学教育、大学生活へのスムーズな移行を目的とし、学習技能、学習意欲、さらには大学生としての自覚の涵養までを含む、正課、正課外にわたる総合的教育プログラム[2]」としており、大学生活へのスムーズな移行に対して、本学科ではゼミ指導を中心におこなわれていた。ゼミ指導を中心においた場合、松﨑（2014）が「教員の個人差（専攻、資質、到達レベルに対する考え方など）が大きく影響し、２年次に進んだ段階で学生間に格差が生じてしまう[3]」と指摘しているように、本学科でも教員の個人差による学生間の差について度々議論になっていた。そのような中で、大学教育に対する移行に対しては個々のゼミ教員によって差を生じさせるのではなく、必修科目としてすべての学生に同様に初年次教育を提供することとなった。

### (2) 本学科における取り組みの経緯

現在、初年次教育として実施しているものは「保育基礎ゼミⅠ」という科目である。この科目は2022年度のカリキュラム変更以前から存在していたが、2021年度を境にその内容を一新している。本学科開設時、この科目は「保育園や幼稚園の発祥と、時代ごとの変遷を概観したうえで、山陰地域の育児支援や人口対策について、資料の学習や討論を通じて理解を深める[4]」とあり、研究を前提に専門領域の視野の広がりを期待して開設されていた。2019年度～2020年度では、授業の目的・ねらいが「子どもを取り巻く社会の仕組みを理解し、そのあり方について研究、実践する力をつけるために、研究の意義やその方法を理解することができる」、「レポートや論文の書き方を理解することによって、研究方法を身に付ける」、「保育・教育・育児支援に関する身の回りの現象や問題に気づき、情報を収集することができる」、「収集した情報をもとに、児童福祉の課題として設定することができる」[5]と、前年度と内容が変更しているものの、研究論文の作成を前提とした授業科目になっている。2022年度のカリキュラム変更を前に、2021年度の「保育基礎ゼミⅠ」では入学前教育で取り組んだ新聞記事の要約課題をもとにレポートの書き方に焦点を当てた内容を15回授業の内４コマ用いておこなった。残り11コマの内訳は文

献検索や研究ノートの作成が３コマ、卒業研究の見通しを押さえるガイダンスが１コマ、７名の専任教員の指定するテーマについてディスカッションをおこない、保育・教育・子育て支援などに関する様々な考え方や捉え方を身に付けることを目的とした７コマの授業が行われた。2021年度と2022年度は同じ構成で「保育基礎ゼミⅠ」を開講したが、本学科開設から学生の文章力を身に付けるために選択科目として設置していた「文章表現」を2022年度に卒業のための必修科目に位置づけ、学生全体の文章力の底上げを図った。

これらの取り組みの成果もあってか、非常勤講師から学生のレポートの書き方に対する指摘は少なくなっていったものの、別の課題が浮かび上がってきた。「保育基礎ゼミⅠ」の７コマを割いているディスカッションについて、多数の専任教員から、話し合いに至らないという意見が挙がった。１年前期の科目であるために、ディスカッションするための知識が充分でないということもあるが、それ以上にディスカッションに向かうための姿勢や態度、話し合いの方法や意見の出し方そのものがわからない学生が多いのではないかということが考えられた。これに関しては、本学科の開講科目の内、６割以上の科目でグループワークやディスカッション、発表をおこなう授業を取り入れているものの、グループワークやディスカッションの目的や方法を十分に指導できていない中でそのような授業を開設しているということもあり、2023年度のシラバス変更に影響を与えた。

### (3) 初年次教育としての「保育基礎ゼミⅠ」

このような経緯を経て、2023年度の「保育基礎ゼミⅠ」は開設以来おこなってきた卒業研究に関する内容を一切無くし、初年次教育として、大学生活や大学教育のスムーズな移行を目的とした科目として開講することとなった。2023年度の「保育基礎ゼミⅠ」の概要は次の通りである。

**〔授業の目的・ねらい〕**

大学生としての基本的な学習姿勢を身に付ける。入学前教育で取り組んだ課題を元にレポートの書き方を身に付けるとともに、グループディスカッションやプレゼンテーションを効果的に実施するための留意点を、演習を通じて学ぶ。

**〔授業全体の内容の概要〕**

大学生として、自律的に学ぶことを見通し、基本的な学び方（課題に応じた情報や文献の検索、読解と内容の要約、レポートの記述、ディスカッション等）を習得させることを目指し、複数の教員が分担して授業を行う。

**〔授業修了時の達成課題（到達目標）〕**

1．課題に応じた情報や文献を検索・収集することができる。
2．情報や文献を読解し、内容の要約やレポートを作成することができる。
3．グループ内の個々の役割を意識し、調べたこと、考えたこと、話し合ったことを発表することができる。

**〔授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法〕**

1）アイスブレイク／自律的な学びのための心構え／情報の整理
・大学生としての基本的な学びの姿勢を理解する
2）授業前後の情報収集の仕方と情報の整理①
・図書館の利用、文献検索の方法、情報収集の方法について理解する。
3）授業前後の情報収集の仕方と情報の整理②
・文献を読み解く際に必ず押さえるポイントを理解する。文献の内容をノートに記録する方法を確認する。
4）レポート作成①：レポートの枠組み
・大学の授業で課されるレポートとは何かを理解する。テーマ設定からレポート作成に至る手順を学ぶ。
5）レポート作成②：文献の活用と注意事項
・文献の内容をどのようにレポートに記述するのかを学ぶ。レポート作成における注意事項を学ぶ。
6）論証の方法①
・論証とは何か、よい論証と悪い論証について理解する。
7）論証の方法②
・演繹的論証、帰納的論証、アブダクション、仮説演繹法、アナロジーについて学ぶ。
8）レポート作成③：レポート課題提出
・入学前教育をもとに指定された課題に対するレポートを作成する。
9）レポート作成④
・作成したレポートの添削をもとに、レポートに修正を加える。

10）プレゼンテーション①
・プレゼンテーションのポイントと流れを学ぶ。レポートの内容をグループで発表し合う。
11）グループディスカッション①
・グループディスカッションの意義や目的について理解する。
12）グループディスカッション②
・グループに分かれ、各教員の指定するテーマについてグループディスカッションをする。
13）プレゼンテーション②
・グループに分かれ、グループディスカッションで話した内容を発表するための要点をまとめる。
14）プレゼンテーション③
・グループに分かれ、グループディスカッションで話した内容を発表するための資料を作成する。役割分担、想定問答を行う。
15）プレゼンテーション④
・グループディスカッションで話した内容を、グループごとに発表する。

## ４．学修の成果と課題

### １）学修の成果

全科目において、最終回終了後に実施している授業アンケート（回答者：37名、回収率：86.0%）の中で「この授業を受けて知識は深まり、技術（能力）は高まりましたか」という問をおこなっている。その回答を４件法（1:強くそう思う、2:そう思う、3:そう思わない、4:全くそう思わない）で求めているが、「1:強くそう思う」が40.5%、「2:そう思う」が56.8%とほぼ全員が何らかの学習成果を感じ取っていることが窺える。なお、「3:そう思わない」が2.7%で「4:全くそう思わない」と回答した者はいなかった。さらに、同アンケートにおいて、授業の難易度を４件法（1:大変易しい、2:易しい、3:難しい、4:かなり難しい）で回答を求めている。「1:大変易しい」と回答している者はおらず、「3:難しい」という回答が78.4%、「4:かなり難しい」という回答が5.4%、「2:易しい」という回答が16.2%であった。

受講学生に対し、授業アンケートとは別に、この授業の目的を示した上でさらに授業改善のためのアンケートをgoogle formsを用いて実施した（回答者：38名、回収率：88.4%）。質問の内容は次の通り。なお、質問２・３は授業テーマを示し回答を求めた。質問４は「話す力」、「聞く力」、「考える力」、「書く力」、「まとめる力」、「コミュニケーション力」、「積極性」、「主体性」、「柔軟性」、「リーダーシップ」、「当てはまるものはない」、「その他」から回答を求めた。質問５は各項目に対し５件法（1:全く身につかなかった、2:あまり身につかなかった、3:どちらでもない、4:やや身についた、5:大変身についた）で回答を求めた。

質問１　高校までに「レポート作成」や「グループディスカッション（またはディスカッション）」や「プレゼンテーション」に関する授業を受けたことがありますか。
質問２　全15回の授業の中から、自分にとって良かった、役に立った、もっとやりたいと思う内容の授業を全て選択してください。
質問３　全15回の授業の中から、改善した方がよいと思う授業を全て選択してください。
質問４　この授業を通して、授業前より向上したと思う力を全て選択してください。
質問５　15回の授業を終えて、次の項目について、どの程度身についたと考えますか。当てはまるものを回答してください。
1．テストや課題に備えて、自ら進んで勉強できる力
2．講義内容をノートにまとめることができる力
3．課題に必要な資料を、図書館やインターネットで検索できる力
4．課題に適した資料を、集めることができる力
5．締め切りまでに余裕をもって課題を終えることができる力
6．テーマに沿ってレポートをまとめることができる力
7．論理的にレポートをまとめることができる力
8．.講義に備えて予習復習ができる力
9．パワーポイントを使って発表ができる力
10. 分かりやすいプレゼンテーションができる力
11. グループで協力し合って作業ができる力
12. グループでの話し合いに参加できる力
13. グループの中で自分の役割を見つけることができる力
14. 情報や文章を読解する力
15. レポートや文献の要約を作成することができる力
16. 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力
質問６　この授業を良くするためのアイデア・ご意見、あるいは授業を受けての感想を記入してください。

質問１について、「保育基礎ゼミⅠ」で扱った「レポート作成」や「グループディスカッション」、「プレゼンテーション」について半数以上（55.3%）の学生が高校までに実施したことがあると回答を得た。実施した内容は次の通り

①　レポート作成

・高校３年生の時に化学の授業でレポートを書いた。
・高校３年生の英会話の授業の時にレポート作成をした。

②　プレゼンテーション

・高校生の時に課題研究という授業で、調べ物をしてから意見交換をした後まとめ作業を行い、みんなに発表するという授業を受けた。
・パワーポイントを使用して自己紹介を、高校２年生の時に受けた。
・高校の時の英語の時間にパワーポイントを使って発表する時間があった。
・高校３年生の時、課題研究という授業でパワーポイントを使い、地域の方達に発表した。
・高校の時、班ごとに分かれて後輩たちの前でプレゼンテーションをおこなった。
・高校３年生の頃の課題研究の発表でプレゼンテーションの資料を作り発表する授業があった。

このように、プレゼンテーションを高校在学時に課題研究を通して多くの学生が経験していることがわかる。グループで発表するためには、その構成員間で何らかの話し合いが行われているはずであるが、意見交換について言及した者は１名のみであった。そして、レポート作成に関しては個別の教科目での実施を挙げており、高校によっては実施されていないことが明らかとなった。

次に、全15回の授業の中で、学生にとって良かった、役に立った、もっとやりたいと思う内容の授業は図１の通りであった。

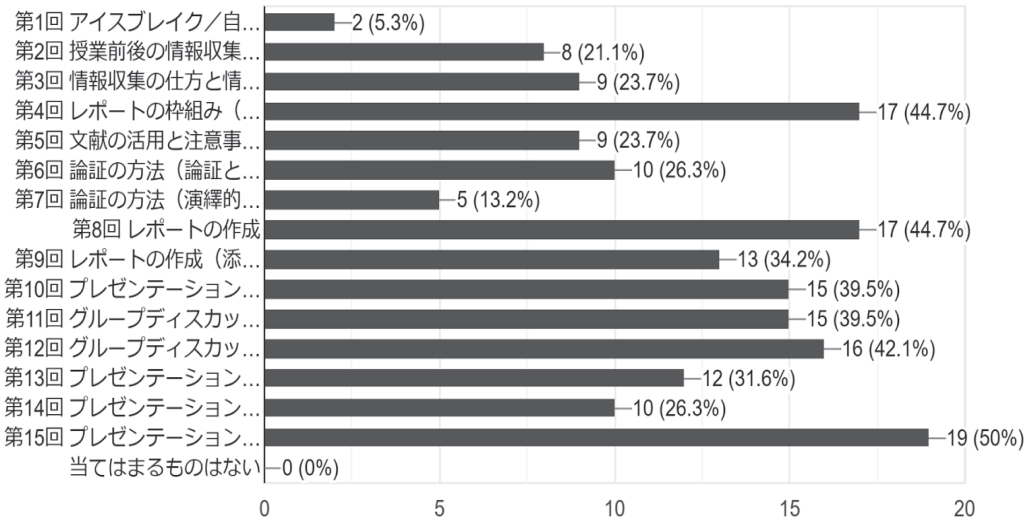


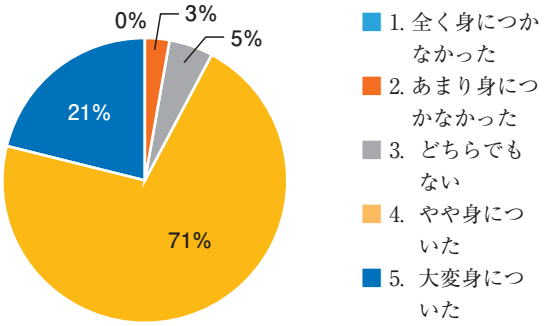

図１　良かった、役に立った、もっとやりたい内容

具体的な内容を質問していないものの、質問６の回答から次のような内容であった。

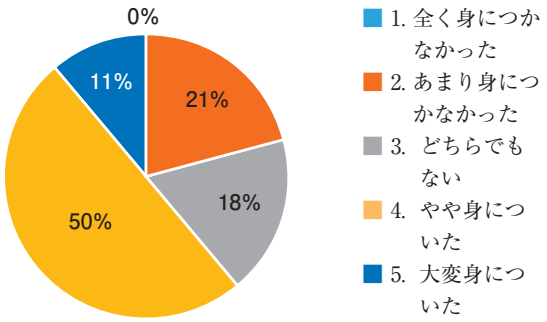
・文章を書く力や、まとめる力、人に伝える力を身につけることができてよかった。
・レポートの作成をして、文章力やまとめる力が身についたと思った。
・この授業で、グループの中で自分の役割を見つけて、積極的に取り組むことができた。
・レポート作成の基礎がわかり、ゼミのみんなと一から考え、発表出来て考える力が身についた。
・レポート作成やグループディスカッションは今までの授業でやったことがなかったのでたくさんのことを学べて良かった。
・グループで活動する際は自分から積極的に意見を述べることができて良かった。

最後に、質問５の回答を次にまとめて示す。

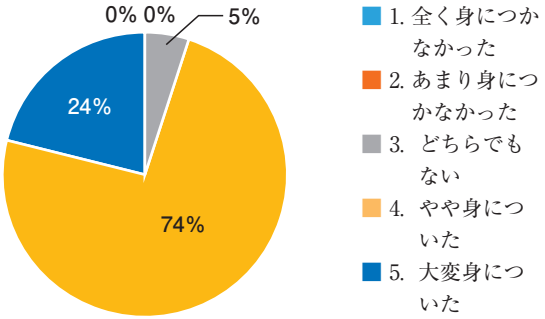
1．テストや課題に備えて、自ら進んで勉強できる力



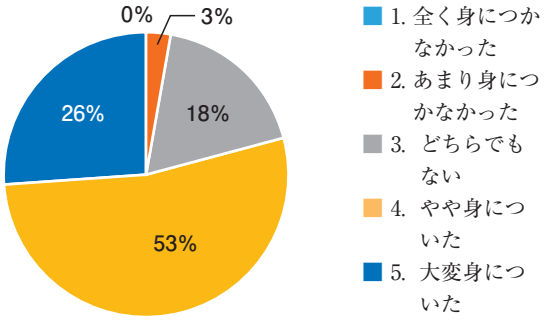

2．講義内容をノートにまとめることができる力



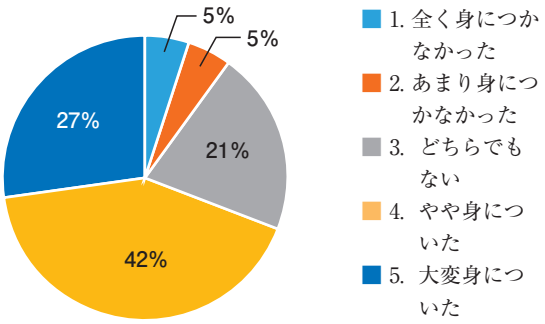

3．課題に必要な資料を、図書館やインターネットで検索できる力



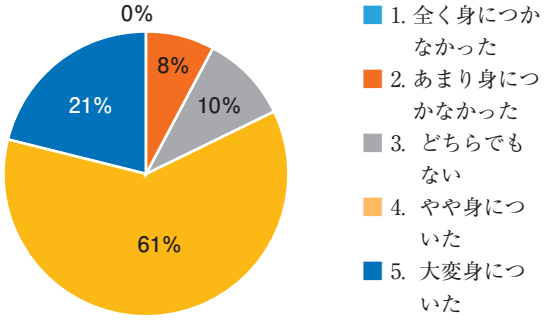

4．課題に適した資料を、集めることができる力



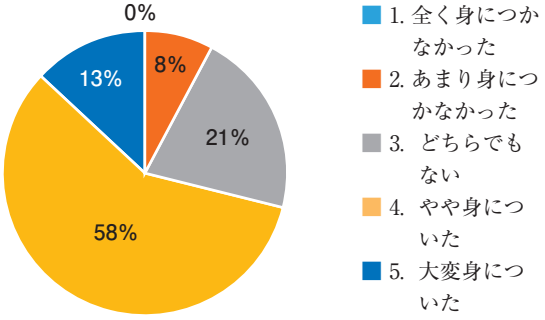

5．締め切りまでに余裕をもって課題を終えることができる力



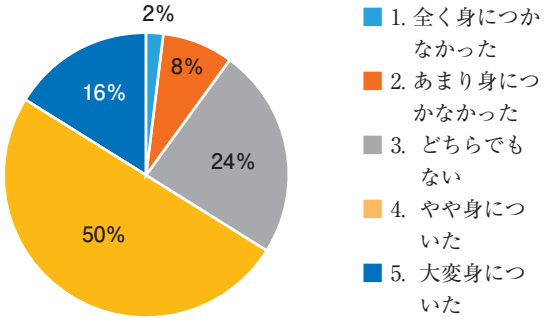

6．テーマに沿ってレポートをまとめることができる力



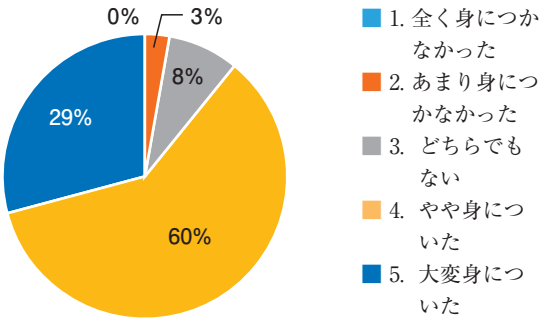

7．論理的にレポートをまとめることができる力



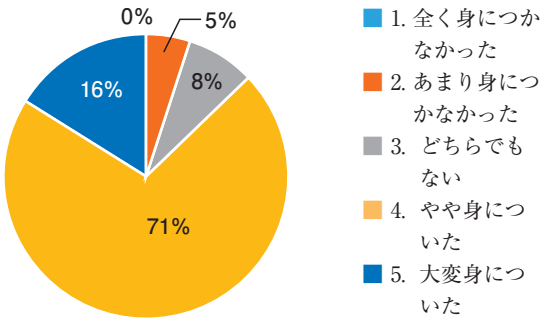

8．講義に備えて予習復習ができる力



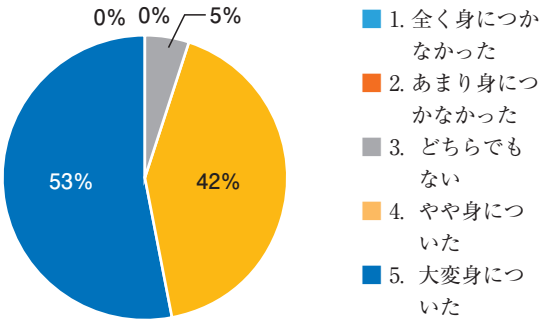
9．パワーポイントを使って発表ができる力



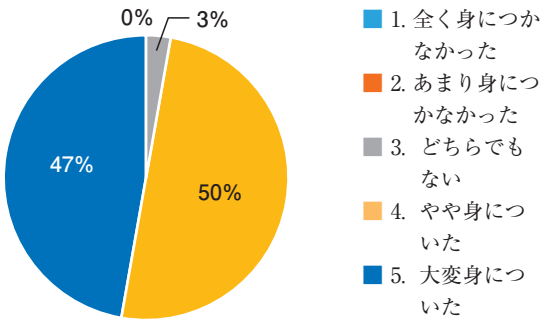

10. 分かりやすいプレゼンテーションができる力



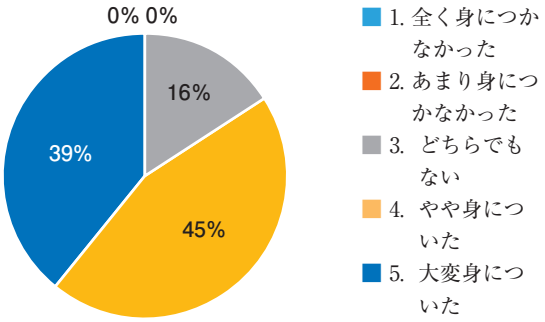

11. グループで協力し合って作業ができる力



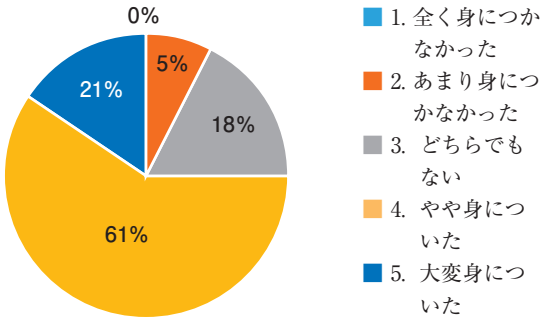

12. グループでの話し合いに参加できる力



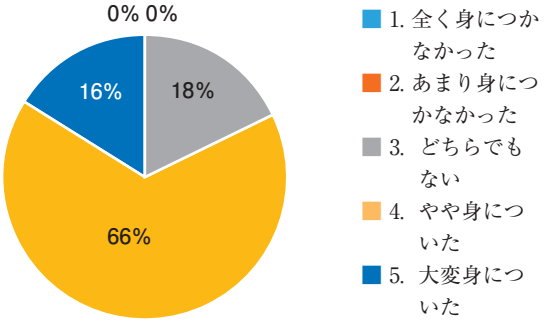

13. グループの中で自分の役割を見つけることができる力



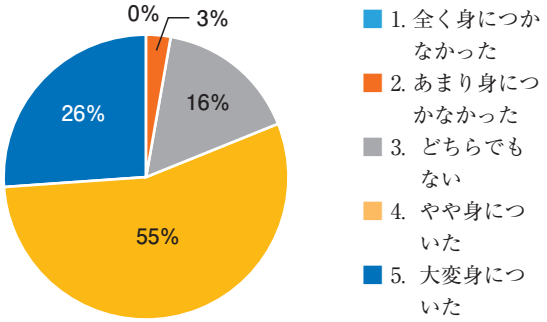

14. 情報や文献を読解する力




15. レポートや文献の要約を作成することができる力




16. 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力



### 2）授業の課題

質問3・4について、回ごとにその回答を次に記す。

① 第2回・第3回
- 情報収集の仕方の授業で、いまいちやり方が分からず終わった。説明だけや、個人で行うだけのやり方ではなく、まずは同時進行で同じものを調べて調べ方の理解ができてからする方がいいと思った。

② 第2回・第3回・第4回
- 授業の内容が少しわかりづらかった。

③ 第5回
- 授業の内容が少しわかりづらかった。
- 文献の活用の仕方をもっと詳しく教わりたかった。

④ 第6回
- もっとしっかり説明や練習が欲しい。レポートを書くときに難しかった。

⑤ 第7回
- 内容が少し難しかった。

⑥ 第8回
- 書き方をもっと学べるように変えてほしい。

⑦ 第11回
- もっと話しやすいテーマを出したほうがよい。

⑧ 第14回
- あまり発表の練習ができなかったので、練習の時間が欲しい。
- プレゼンの作り方を学びたい。

回答のあった者は38名の内13名で各回多くても3名程度であったものの、課題が残るものとなった。特にレポート作成に関しては、多くの学生が成果を実感している一方で、つまずきを感じている学生がいることもわかり、丁寧な説明が求められることがいえる。

## 5．授業総括

### 1）課題提出の習慣化

大学生活や大学教育のスムーズな移行を目的としておこなったが、その成果については2年間の学びを見通して長期的な視点で考えていきたいと考えている。毎回の授業で、「振り返りシート」の提出を求めた。当日欠席した学生を除いても全員が提出する回は少なく、後半は学習疲れからか未提出の学生が増加し、課題提出の習慣化には至らなかった。

初回授業でおこなった「情報の整理」については、授業者の学生時代の経験から手帳による情報管理の方法について指導をおこなった。スマホで全ての情報を完結させ、生活を送る昨今の学生にとって、情報収集から整理の方法を知るための一助になったのではないかと感じている。しかし、その個人差は大きく、学生によっては手帳やカレンダー機能を活用せずに、写真やメモ帳を蓄積していく方法をとっていることから必要な情報を引き出して確認することに未だ課題を抱えている者も少なくない。教員から方法を教示するだけでなく、学生同士で活用しやすい情報整理の方法を共有する機会を作り、能動的に学ぶ環境を形成することも必要だと考えられる。

### 2）レポート指導

レポートの必要条件を理解するために、論証の意味や代表的な論証方法について学習したことは、レポート作成にとって効果的であった。しかし、帰納的論証や仮説演繹法、アブダクション、アナロジーに関しては例文による解説に留まり、具体的な理解とは至らなかった。学生の準備学習として、論証の不十分な小論文を示し、その不十分さを指摘させたことやその改善例を示したことで論証の具体例を確認することに繋がり、学びのプロセスとしては一定の効果を感じ取ることができたが、授業中の様子から、準備学習に取り組まなかった学生が少なからず存在していた。

レポートの授業回において感じている学生の課題からは「分かりにくい」という意見が目立った。文章を書くということ自体が少ない学生が多く、学生の習熟度に合わせた個別指導の必要性が迫られている。レポート作成に関して、講義前の各学生の出発点は様々である。習熟度が様々であるということを意識して、説明中心の授業形態ではなく、反転授業やジグソー法を用いるなど、授業方法の改善も検討する必要があると感じている。

### 3）グループディスカッション

学生が挙げた「授業の課題」の回答の通り、学生が情報を得やすく、自らの考えを話しやすいテーマを検討する必要がある。解良・出口（2017）は課題に対して心理的に没入している状態を指す「エンゲージメント」に着目し、グループ活動に興味や楽しさを感じている個人は、グループ活動を通して学習内容の理解や

メンバーとの交流といった社会的な側面にも成果を高く感じていることを指摘している[6]。短期大学の授業が始まって12週目頃の授業としては、直近の学習内容に関するテーマ設定を検討する必要もあると考えられる。併せて各グループを担当する教員の指導にも差が大きくみられ、指導方針について一定の方向性を検討することが必要である。

### 4）プレゼンテーション

相手に伝える内容のまとめ方や聞き手に効果的に伝える技術といったプレゼンテーションの基本となる事項を説明した後、学生それぞれがこれまでに作成したレポートの中で、特に他者に伝えたい部分にアンダーラインを引き、グループに分かれて個人発表をおこなった。発表では、テーマ設定の動機、問題の背景、結論の根拠、そして結論の順に倣って話を進める姿勢が見られたが、１コマの授業でプレゼンテーションの基本について講義を受け、要点をまとめて発表し合うには、時間的に余裕がない印象を受けた。そのため、後半の時間は個人発表用のレジュメを作成する時間に充て、教員がその内容をチェックした上で、次回の授業で発表をおこなう形式に変更するなどの工夫が求められると感じた。一方、発表内容の構成を意識しようとする学生が多かった点は、今後の成長に繋がる重要な姿勢であると感じられた。しかし、一部の発表では結論の根拠や背景説明が不十分であったため、さらに具体例を挙げて分かりやすく伝える練習や、聞き手の視点に立って情報を整理する方法を指導することが課題として挙げられる。

また、本講義で指導した「①落ち着いて堂々と話す」「②原稿を読み上げない」「③全員に聞こえる大きさの声で話す」「④姿勢に気をつける」というポイントについては、多くの学生が意識して取り組んでいた。さらに、聞き手も頷いたりメモを取ったりする姿が見られ、積極的に関わろうとする意欲が感じられた。「話の流れが分かりやすかった点」「改善が必要な点」を挙げる形で、建設的な意見交換を促すなど、学生同士でのフィードバックの時間も設けることで、他者の視点を取り入れながら、より実践的なプレゼンテーションスキルを身に付けられるよう支援することも大切であると感じられた。

## 6．今後の課題

2025年度入学生よりカリキュラムの再編をおこない、「保育基礎ゼミⅠ」の前半部分であるレポートの書き方を中心とした授業を「教養基礎演習Ⅰ」、グループディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を「教養基礎演習Ⅱ」として位置付ける。また、入学前教育もこれまでと同様に実施していくことにしているが、短期大学の授業や実習でよく出てくる漢字や文章について身近に感じてもらうためにも漢字の書き取りや読みなども入学前教育に取り込んでいくことを検討している。

学科内で日々授業や学生指導の中での悩みや苦労と改善策について話し合いを重ねているが、近年の学生の課題として「適当な人間関係が築けない」、「学習習慣が身についていない」、「学習方法がわからない」、「情報の整理、スケジュール管理ができない」、などが挙げられる。学生同士の人間関係・仲間関係については、保坂・岡村（1986）[7] が示した児童期後半からギャング・グループ、思春期前半にはチャム・グループ、高校生の頃にはピア・グループが形成されるという考えは、今の学生には当てはまらず、須藤（2014）が、青年の多くがチャム・グループの段階にとどまりつづけている[8]、と指摘しているように、グループの凝集性、排他性、閉鎖性、異質なものへの排除は度々みられ、心理的安定性を保持した状態での学習が困難になっていると考えられる。そのような中では、短期大学の２年間は仲間関係の形成においても、アイデンティティの形成においてもモラトリアムの段階で終えることとなる。集団に対する授業ではこれらの課題の解決は困難であり、個々の学生の実情に応じた個別指導がますます必要になってくると考えられる。

今回は、一つの科目を取り上げ、初年次教育の意義や課題について考察してきたが、他の授業の中にも大学生活や大学教育へのスムーズな移行を目的とした要素は含まれていると考えられ、それらを総合的に概観して本学科における初年次教育の課題や改善点を検討していく必要があると考えられる。今後も授業総括を中心として教員間で授業改善の取り組みを継続し、教育の質の維持・向上に努めていきたい。

## 注

1　令和4年度大学入学者選抜実施要項, 文部科学省, https://www.mext.go.jp/content/20220705-mxt_daigakuc02-000010813_1.pdf, 2023年7月22日取得.

2　初年次教育学会編,『進化する初年次教育』, 2018, 世界思想社.

3　松﨑陽子,「短期大学における初年次教育の現状と課題」,『星稜論苑』(43), 2014, 41-48.

4　「2018年度講義概要」, 大阪健康福祉短期大学, 保育・幼児教育学科, 2018, 26.

5　「2019年度講義概要」, 大阪健康福祉短期大学, 保育・幼児教育学科, 2019, 31.

6　解良優基・出口拓彦,「自分とメンバーの感情的エンゲージメントがグループ学習への態度に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』41, 2018, 73-76.

7　保坂亨・岡村達也,「キャンパス・エンカウンター・グループの発達的・治療的意義の検討」『心理臨床研究』, 4, 1986, 15-26.

8　須藤春佳,「友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係」『神戸女学院大学論集』61（1）, 2014, 113-126.

## 参考文献


服部茜,「大学生の友人関係における不寛容の検討」『日本教育心理学会第65回発表論文集』PA028, 2023, 118.

保坂亨,『いま、思春期を問い直す－グレーゾーンにたつ子どもたち』, 2010, 東京大学出版.

櫻井茂雄,『動機づけ研究の理論と応用：個を活かしながら社会とつながる』, 2024, 金子書房.

佐藤有耕,「高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析」『神戸大学発達科学部研究紀要』3(1), 1995, 11-20.

樽木靖夫・川田裕樹・榊原健太郎・福田八重・大日向浩・馬場千秋,「大学生の自己形成モデルの検討」『帝京科学大学紀要』9, 2013, 15-23.

樽木靖夫・榊原健太郎「大学生の自己表現への方略のなさを低減する試み－話し合いに焦点をあてて－」『帝京科学大学紀要』10, 2016, 177-182.

鵜飼昌男,「高大接続から見た大学の初年次教育のあり方について－入試が選抜機能を十分果たさない現状に対する提案」,『関西大学高等教育研究』, 第10号, 2019, 37-46.